

人類のためにいま熊本で「ピープル」 ことは——(財)国際医療交流センター設立に向けて

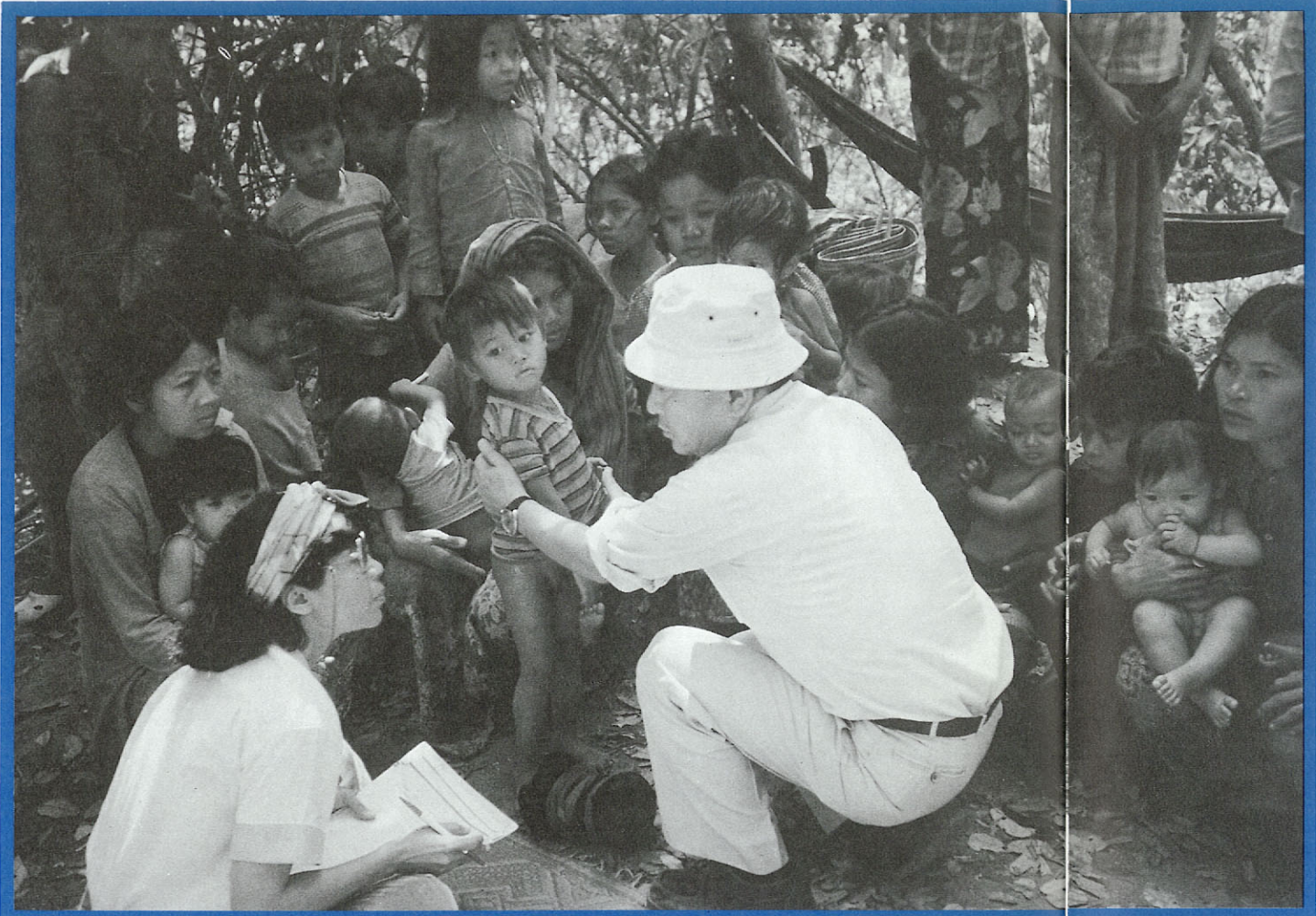


国立熊本病院長
ありた いさお
蟻田 功博士

一九八〇年、世界保健機関(WHO)は、全世界からの天然痘根絶を宣言。多くの人が恐れ、苦しんできた一つの病気が、完全に地球上から姿を消した瞬間である。これまで人の力で病気が根絶されたという例はなく、今世紀の予防医学最大の成果として人々の記憶にとどめられた。

この偉業を成し遂げたのはWHOの天然痘対策本部。その本部長として頭指揮をとったのが、現在の国立熊本病院長、蟻田功博士である。博士は厚生省に入省後WHOに出向。昭和四十二年から天然痘根絶プロジェクトに参加し、同五十二年からチームリーダーとして活躍した。その功績によって昨年、栄えある日本国際賞、県民栄誉賞を授与された。*注1 当時、天然痘で、南米やアフリカなどを中心になお三十二カ国の人々が苦しんでいました。それぞれバラバラの取り組みでしたので、なかなか征服できなかった。それが、WHOを中心に広域的な協力体制をとったことにより、根絶できたんです。そしてなによりも、この成功によって、やればできるという自信を途上国が身につけてくれました。これは大きな収穫でした。ね。エイズ対策をはじめとする今後の医療の取り組みにも良い影響を与えたいと思います。*

天然痘根絶の成果は、予防医学の重要性がクローズアップされる大きなきっかけとなった。そして、次なるステッ



タイ国境における避難民の感染症調査
(1984 国連調査団活動の一環として)

つても、そこで働く医療従事者の質や地域住民の意識を高めなければなりません。今日本に求められているのは、「人材育成」というソフト面での援助なんです。*

幸い熊本には国際レベルの医療機関や研究所、人材が揃っており、開発途上国の人々を受け入れるに充分な土壌は整っている。ことにエイズやATL(成人T型細胞白血病)に関する研究水準は、非常に高いと博士は強調する。「熊本の医療機関だけでなく、全国の研究機関、ひいては海外の関連機関との共同研究こそ、重要だと思っんです。小回りがきいてフレキシブルな対応ができる。政府レベルではできないことがやれるようになるんです。」

真の国際化とは、国際社会の要請にいかにか心を砕いてこたえるかということだと博士は言う。「国際医療交流センター」は、実のある国際交流を実現していくために重要な役割を担うだろう。昨年九月に設立準備委員会を結成三億円を目標に募金活動が始められた。忙しい公務の合間を縫って、博士はあちらこちらに足を運び協力を訴えてきた。その精力的な活動は、天然痘根絶のため、世界を駆け回った姿を思い起こさせる。

戦後アメリカはフルブライト留学制度を作り、日本人を米国へ招いて高度な技術を学ばせてくれた。その恩を忘

れてはいけないと思うのです。そして、今度は日本が途上国に対して援助をする番。受けた恩は返す、そういう気持ちで今の日本には必要です。センター設立の根底には、このフルブライト精神——奉仕の心というのがあるんです。募金活動を通じてボランティア意識が高まっていけば、それは県民にとって大きな経験になるし、これからの熊本県の発展にもつながっていくのではないかと。そう信じているんです。*

既にいくつかの研究開発の依頼もきており、スタートラインはもうそこまできています。熊本が医学における研究開発基地として国際社会に貢献できる地位を得ることができるのも、そういう話ではないかもしれない。

「やればできる」、穏やかながらも自信に満ちた博士の語り口がそれを物語っている。

*注1 日本国際賞

世界を対象に科学技術の進歩に寄与した個人に贈られる賞。財団法人国際科学技術財団が設立した。蟻田博士は昭和六十三年四月、第四回同賞を受賞。

*注2 県民栄誉賞

広く県民に敬愛され希望と活力を与えることに顕著な業績のあった者について、その栄誉をたたえることを目的とし、昭和五十九年創設された。第一回受賞者は柔道の山下泰裕氏、蟻田博士は昭和六十三年四月に第二回同賞を受賞。

*注3 フルブライト留学制度交流計画

第二次大戦後アメリカが自国と諸外国との相互理解を深める目的で始め大学院生、専門家、教育者の交流計画。日米間では1950年から実施。

● 寄付手続きの問い合わせは、国際医療交流センター設立準備委員会事務局。090(0)90(0)909090または(090)90901へ。

プへの布石ともなったのである。

今、博士は、千数年にわたる自らの国際医療協力の体験を基に、郷里熊本に国際医療協力機関となる「財団法人国際医療交流センター」を設立すべく、

広く各界に呼びかけている。

「日本の政府開発援助金(ODA)の額は世界」を誇っているが、残念なことには実際の貢献度は高いとはいえない。いくら立派な病院を建てて医療機器を贈